

猿 橋 大原村猿橋(第五四番ノ一、第五六番ノ一、第五七番)地内(官有)に在り。桂川の斷崖に架せる橋梁にし

て古來木曾の懸橋、周防の算盤橋と併稱し日本三奇橋の一たり、橋長十七間巾三間、橋より水面に至る十七間弱、世に三十三尋と稱し來る。一の支柱無く嶋巖幽峽をなし碧潭緩く廻り老樹鬱然として之を覆ふ亦得がたき勝地なり。荆造の年時詳かならねざ口碑に據れば今を距る一千有余年前猿猴の藤蔓に緣り對岸に通ずるを見て之に倣ひ架橋せしものなりと云ふ。

橋畔に山王宮(猿猴を祀る)の小祠あり、毎年七月例祭を行ふ。大原村心月寺由來調書に依れば、今を去る一千有余年前百濟國の志羅呼僧圓なるもの猿橋最初の架橋匠者にして此地に草庵を結び猿橋探月庵と稱し居住せし、と云ふ。

文明十九年二月、聖護院道興郷此地を過り詩歌を詠せり、其他碑銘、古詩、俳文等其奇趣を諳えるもの渺からず、左にこれを抄録す。

【猿橋勝詠】

◇猿橋さて川の底千尋にをよひ侍るうへに三十餘丈の橋を渡して侍りけり此橋に種々の説あり昔さるの渡しける
なご里人の申侍りきさることありけるにや信用しがたし此橋の朽損の時はいつれに國中の猿飼さもあつまりて
勸進なごして渡し侍るさなんしかしあらば其由緒も侍る事ありしかし奇妙なる境地なり

聖 護 院 道 興

名のみしてさけふもきかぬ猿橋のしたにこたゆる山川のこゑ
たに深きさはのいはほのさる橋は人も梢をわたるとを見る

此所の風景更に凡景にあらずこふる神仙逍遙の地と覺は侍る

雲霞漢々度長梯、四顧山川眼易迷、吟歩誤令疑入峽、溪隈殘月斷猿啼

◇ 荻 生 徂 徠

爭傳花菓洞中事、却駭危橋百尺長、楚猴冠來人自喜、不知究谷有猿王。

◇ 山 雪 翁

猿橋佳橋傳四方、今日來見忽愕然、曾想虬龍臥波勢、藤蔓撐着架雲邊。

◇ 青 邨 廣 瀬 範

駛水滙成潭、峭崖突相逼、滌々一條鳴、黝々万象黑、飛橋架空冥、長虹橫嶺巔、結構費人工、規模奪化力、
徠翁筆入神、記來精妙極、紙價爲之騰、柳州有怯色、予亦企前賢、苦吟倚欄立、脫波聞躍魚、投樹見歸翼、
上馬就征途、天寒烏帽灰、前驛夕雲西、舉鞭指山肋。

(附記) 此筆跡大原村幡野昌之氏現藏せり。

橋の北方屋上に俳碑あり、句に曰く。

うき我をさひしからせよ閑故鳥

はせむ翁

(側面) ひみ聲は山彦にかへて不如歸

信州 埴科 嵐雪

又、橋の南方道路に面して碑あり、文に曰く、

猿 橋 碑 原岡關思恭 篆額

我大日本橋梁之奇巧者周防之算橋岐岨之懸橋峽之猿橋是已峽也者山嶽之所列峙峻巖比連々斗絶不可徑矣比諸蜀門陳倉之阨不易上焉在昔方永錄天正之間武田氏負嶮城峽其耽々開以東諸傑驚者有以夫傳同洪荒之間有猿王跳而抱葛藟緣過斷崖古之智者視而傲之偃巨木於兩崖重以架澗結構成橋人蹟始通矣也爾來工人範之製亦因加焉猿之神工之智天工之代至今鎮臺士女雉兔蕞蕪及行商之通有亡者亡不皆臻焉峽之土埴峽中賦上宜稻梁賦山出金婦女善蠶織厥粟梨橘栗棗亡海運凡百物貨賦而出之厥利巨々萬峽民之爲生惟其猿橋是賴或曰昔者推古帝時百濟人志羅呼者適來過于此見猿王緣藤蔓而涉於是乎淑造橋也未知孰是蓋觀轉蓬而製車見浮葉而爲舟古之智者皆爾余嘗聞之峽人猿橋之壑而絕桂川不盡篠于葛川諸水會同於此深而迅不可測矣橋凡廣丈余袤廿余步不柱加復道厥製甚妙橋下四十有仞而後有水雲霧杳冥故術隨者眩不克正視也是則峽之奇觀焉已石夷庚字由之世峽人而好文辭乃以狀謁余峽吾父母之國也海夢寐峽山川意斯猿橋而母誌孰知厥所由且夫古之人利物成功恬乎亡聞邪奇事夫可沒邪請得子之文以傳諸不朽也則立碑於猿橋心月寺境蓋顯父母之國也余辭不敏不許遂受厥狀閱之則始如聾者所聞因作爲碑文繫之以銘銘曰

二儀之判 天地定位 成山成川 不藉人爲 盖此斷崖 途殫難濟 神矣猿王

跳緣葛藟 智人範之 危橋是始 千載興利 工也何奇 斯之隘陘 万水所歸

匱礎注澗 神魂俱飛 一橋既成 万賴承禴

寶曆五年乙亥之冬十月十五日

東都錦江 鳴 風 卿 撰

東川 平 茂 書 筠 齋 石 川 夷 庚 立

寶永三年九月、荻生徂徠用雪翁と共に祇役入峽し猿橋郵長幡野氏に宿す、其母寡居七年親族の爲めに志を奪はざるを奇とし徂徠猿橋五奇の文を作り雪翁詩を作りて其息子に與ふ、明和七年六月瀧鶴臺(長州儒者)此地を過ぎ徂徠の書を見跋文を作つて之を助く、近時又重野成齋(文學博士)其卷後に書せり、共に大原村幡野昌之(元郷便)氏現藏し家寶とせり。